

2016-5-2

# 犬の骨

福田 寛

○提出機関 Department of Veterinary Resources Weizmann Institute、 Israel

○症 例 ラブラドルレトリバー、去勢雄、4歳

○経 過

①定期検査 中等度の血小板減少症、軽度の白血球減少症、軽度の貧血  
エールリキア症疑い→ドキシサイクリン投与

②全血球数（CBC）改善せず

血小板減少症、軽度貧血、軽度白血球減少症

骨髄細胞診：全体として低細胞性、形質細胞の増加

③免疫介在性の骨髄破壊？ プレドニゾロンの追加

CBC改善⇔プレドニゾロンを減らすと再発⇒クッシング

④免疫抑制剤の変更 プレドニゾロン⇒ミコフェノール酸

⇒CBC改善、皮下膿瘍形成（*Nocardia* spp.分離）

⑤免疫抑制治療ストップ

⇒重度の血小板減少症のため再開

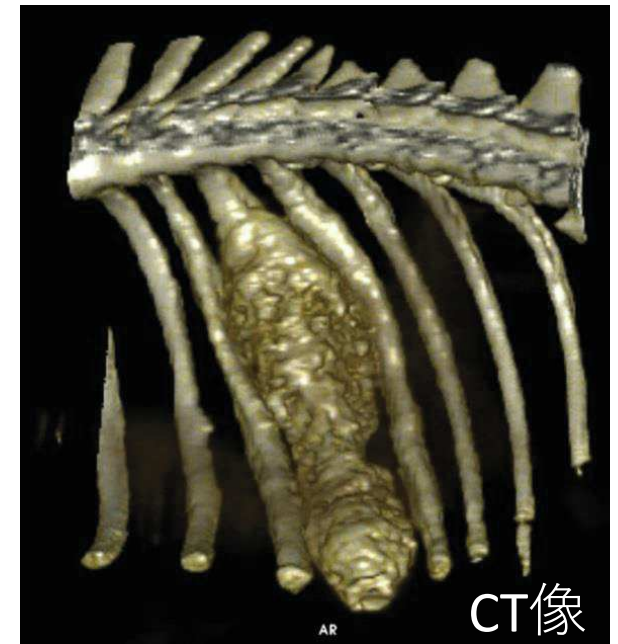
⑥数週間後、胸部側面に15cm長の腫瘤

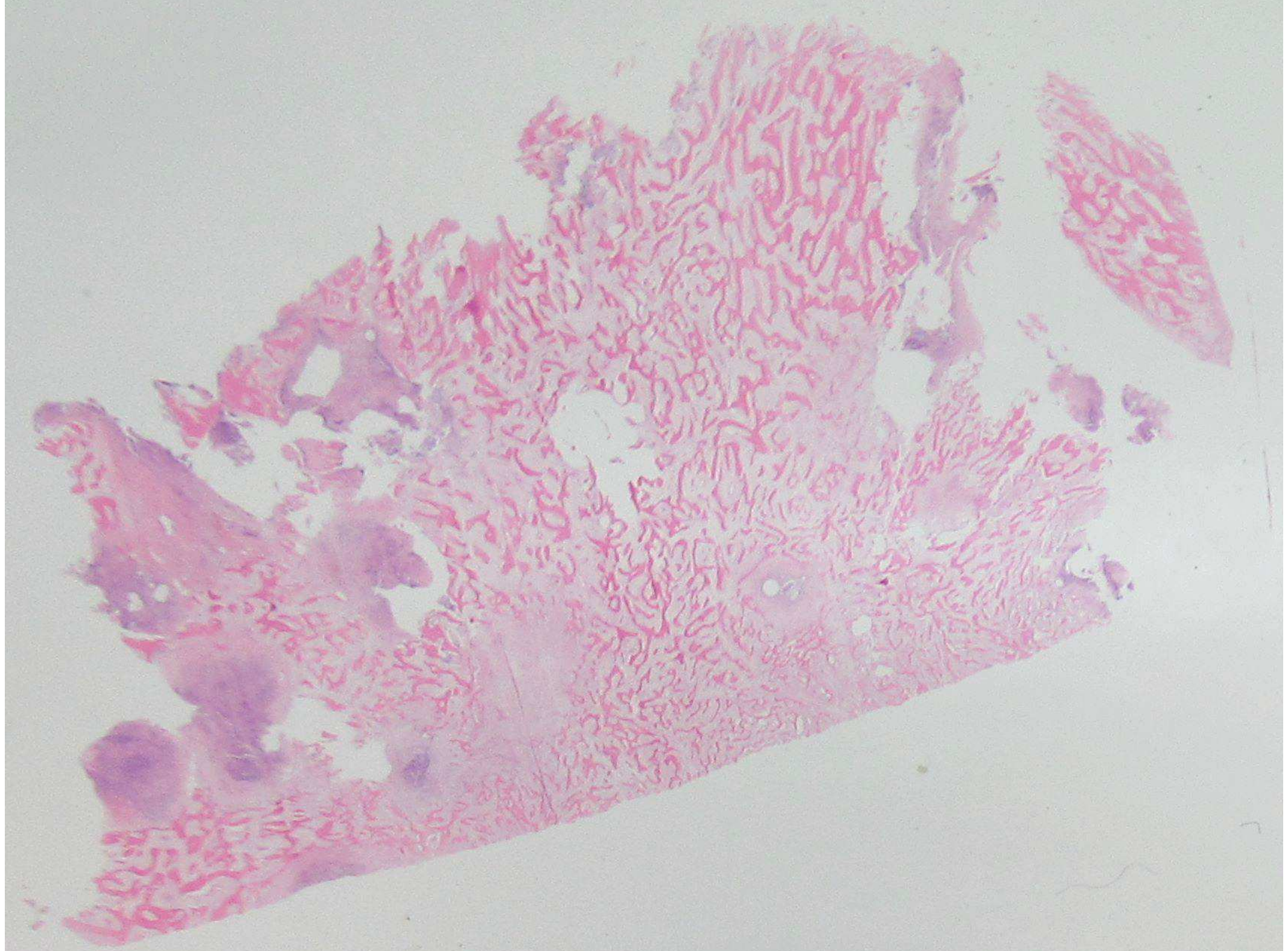
⇒壊死組織切除を実施するも再発

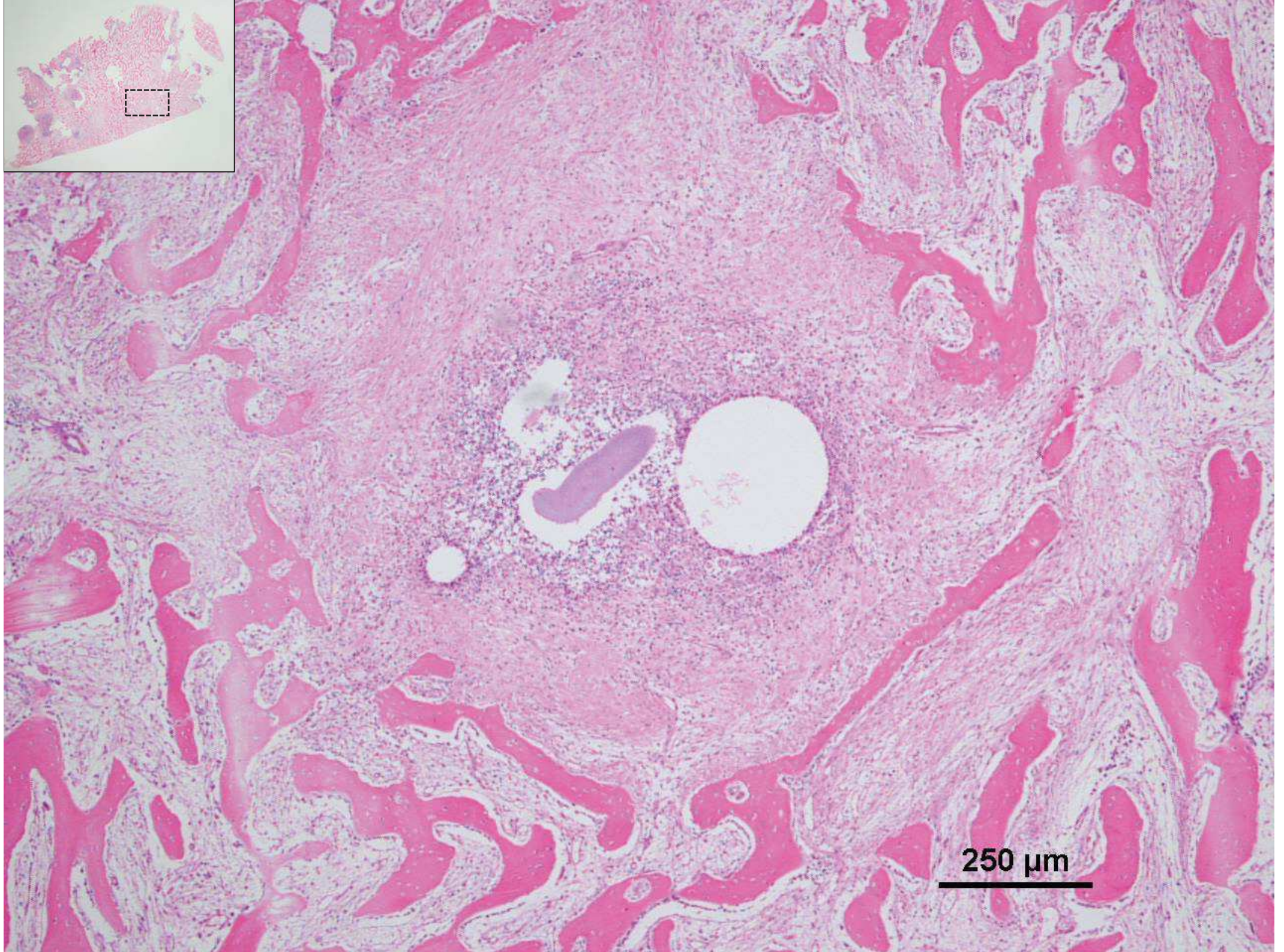
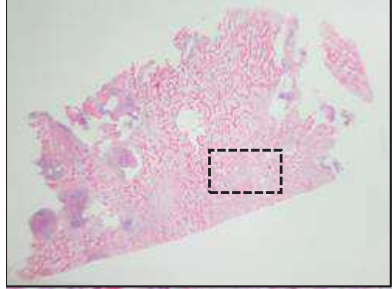
⇒肋骨と腫瘤の結合部を摘出

*Corynebacterium* spp.、*Nocardia farcinica* 分離

⑦予後良好 CBC回復

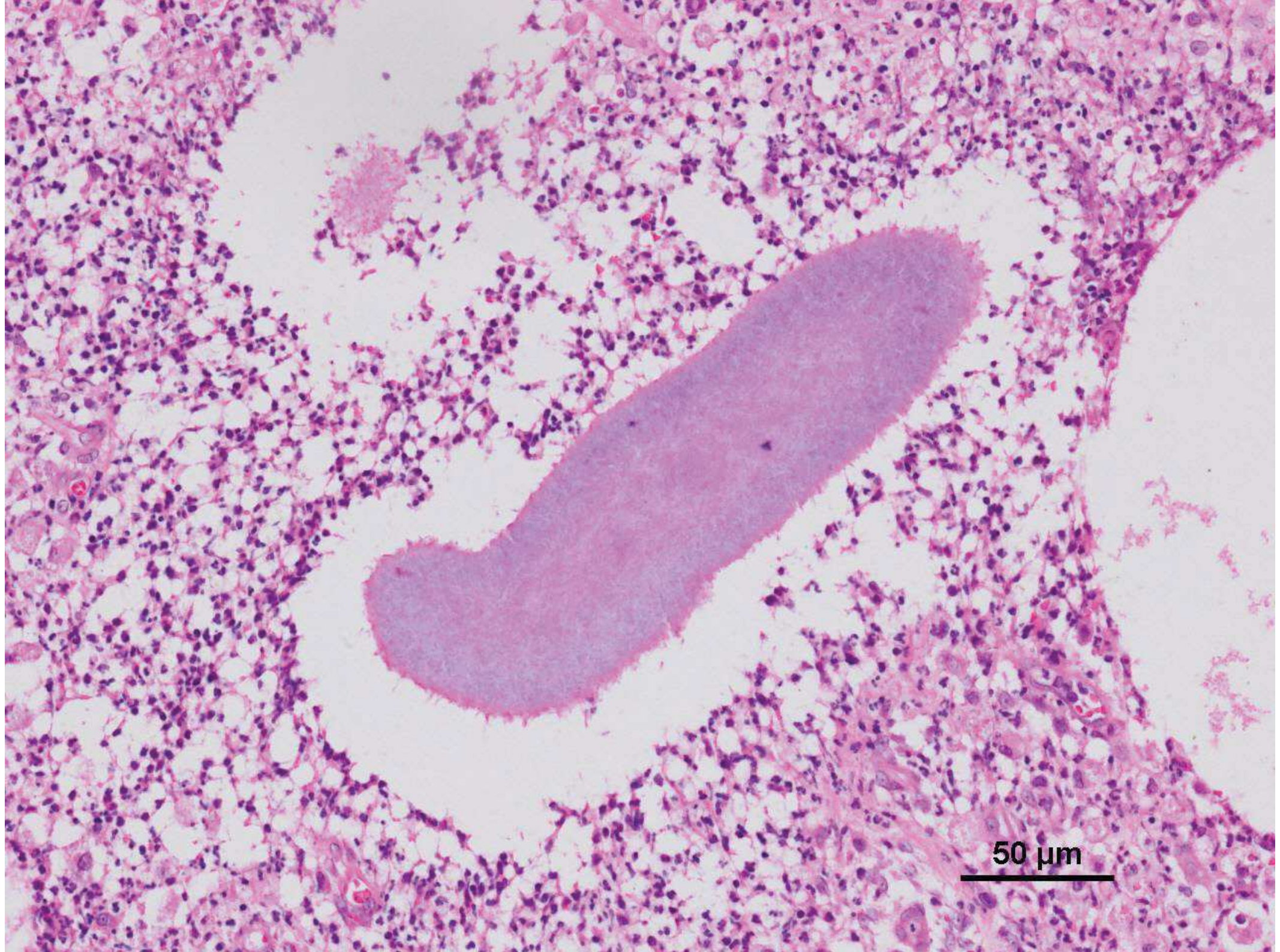




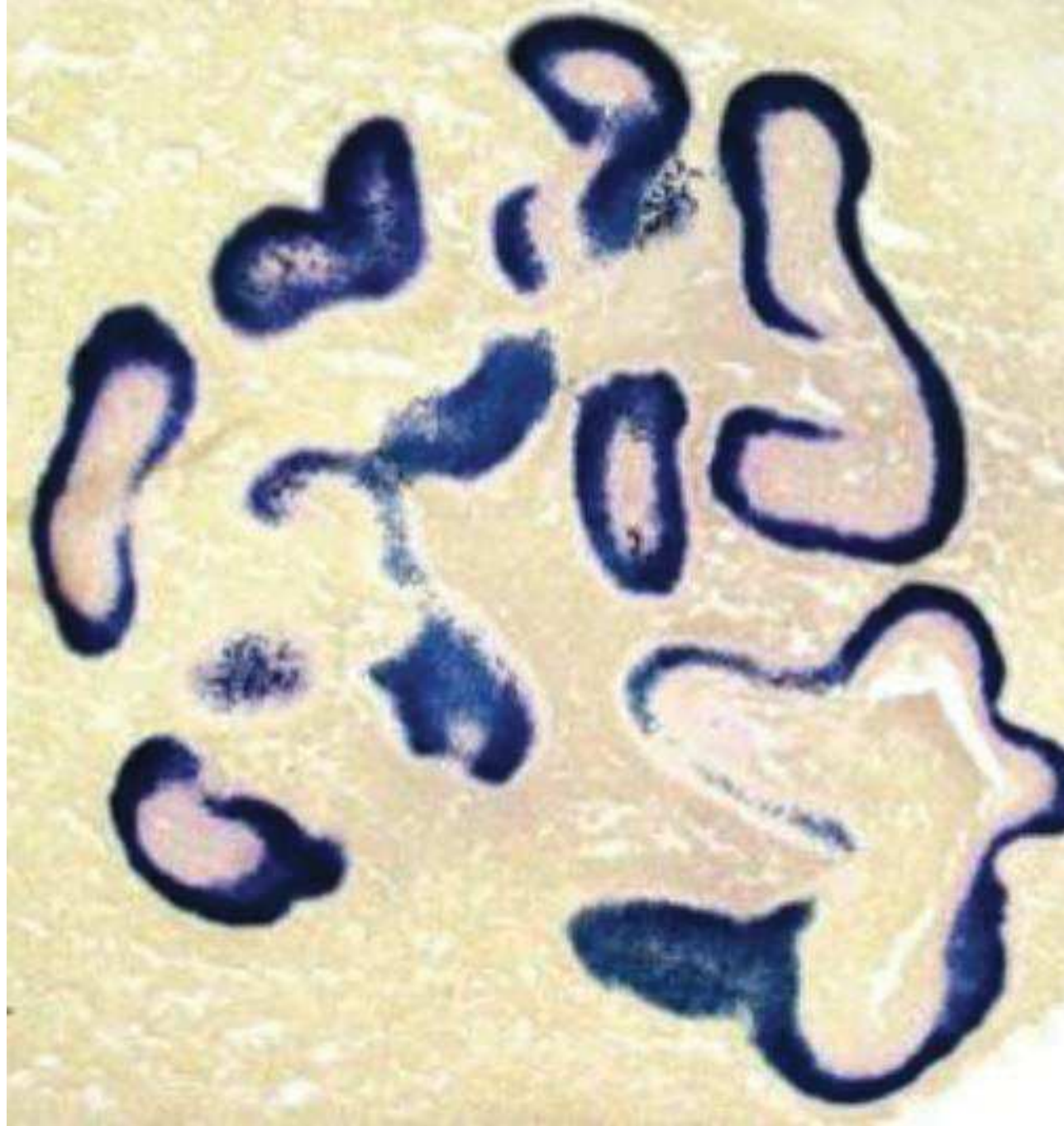


250  $\mu$ m

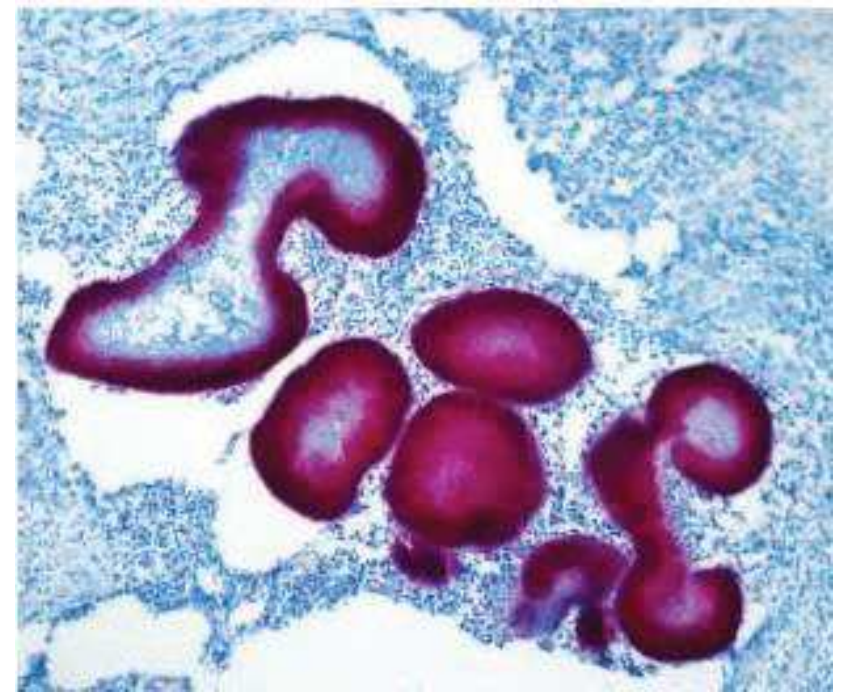
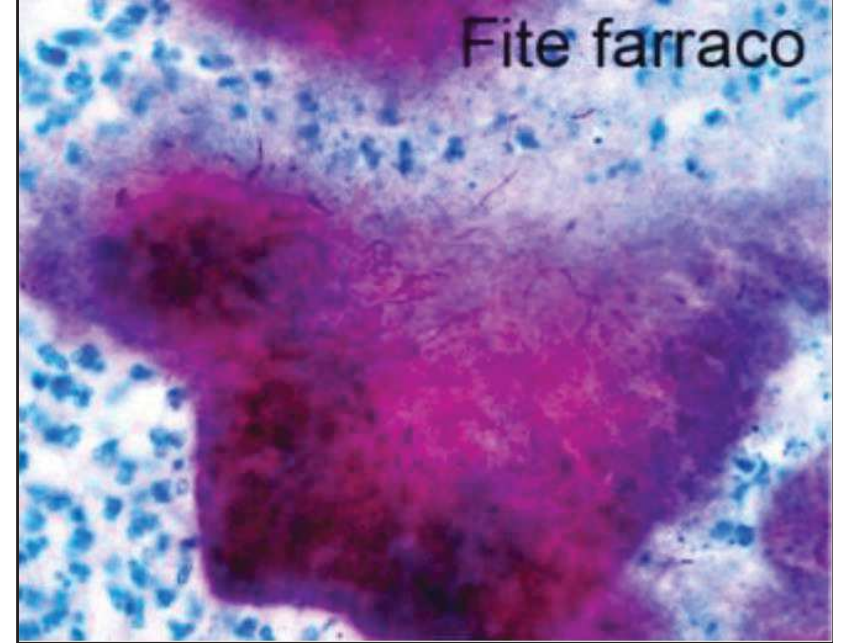
---



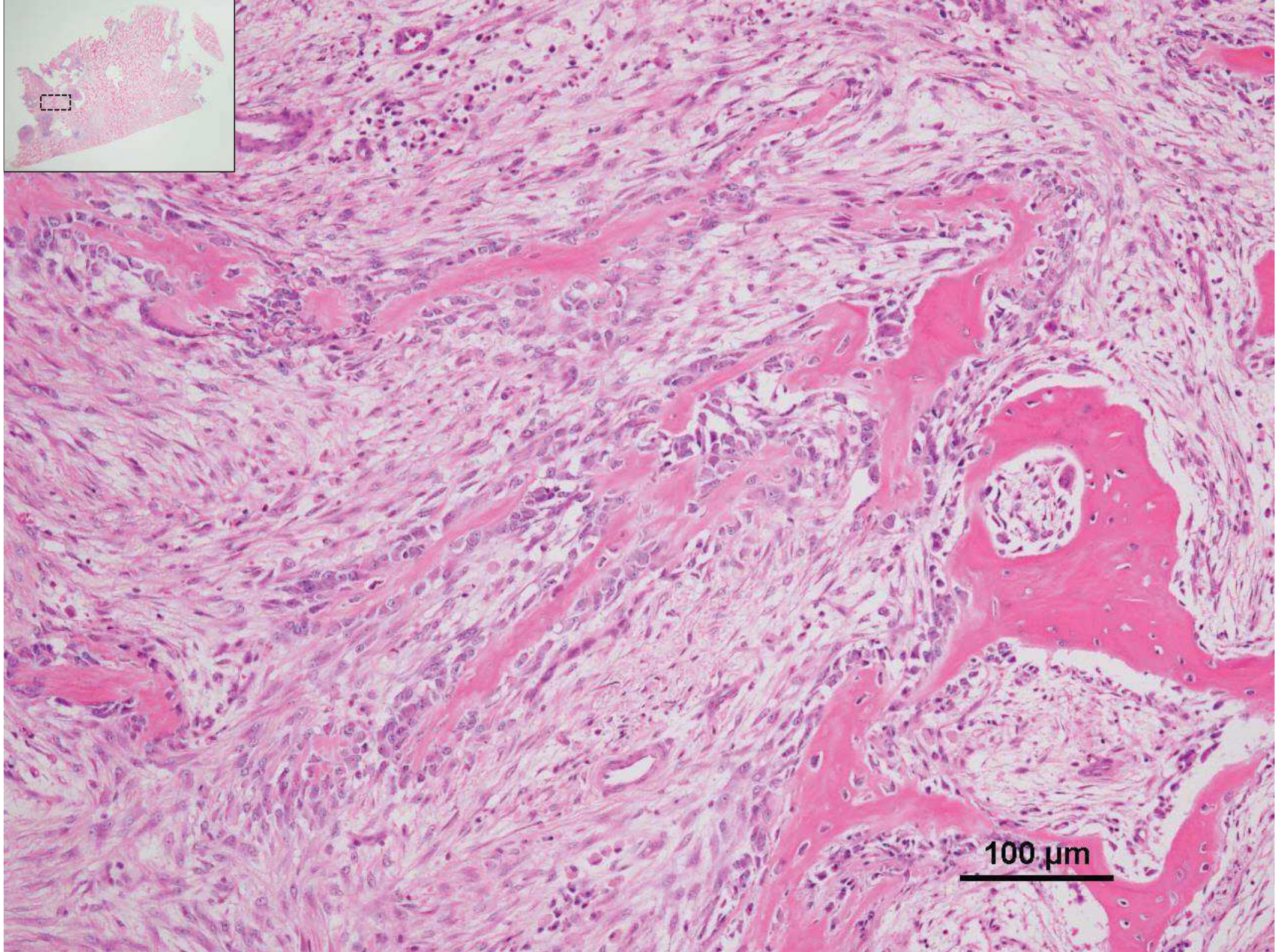
50  $\mu\text{m}$



グラム染色



抗酸菌染色  
(fite-fraco法)



## ○提出者の診断

肋骨：ノカルジア種と一致した細菌塊を伴う重度の化膿性肉芽腫性骨髄炎

Rib: Severe pyogranulomatous osteomyelitis with bacterial colonies consistent with *Nocardia* spp.

## ○JPCの診断

骨：骨髄炎、化膿性肉芽腫性および硬化性、新骨形成と糸状細菌塊を伴う

Bone: Osteomyelitis, pyogranulomatous and sclerosing, with new bone formation and colonies of filamentous bacteria

# ○ 提出者のコメント

## ノカルジア症について

感染原因：イヌ ジステンパー等の免疫抑制

ウシ 汚染された乳房炎の予防・治療薬

感染経路：皮膚の傷・呼吸器からの吸引

直接または血行性に播種

性状：放線菌目 好気性、**グラム陽性**、**一部抗酸性**

滲出液に白色、黄色、黄褐色、灰色の“**硫黄顆粒**”

土壌中に存在、有機物の腐敗、日和見感染の可能性

伝染性はなく、公衆衛生上の危険はない

病変：膿瘍、蜂窩織炎、瘻管、密な線維性腫瘤、

肉芽腫性乳房炎

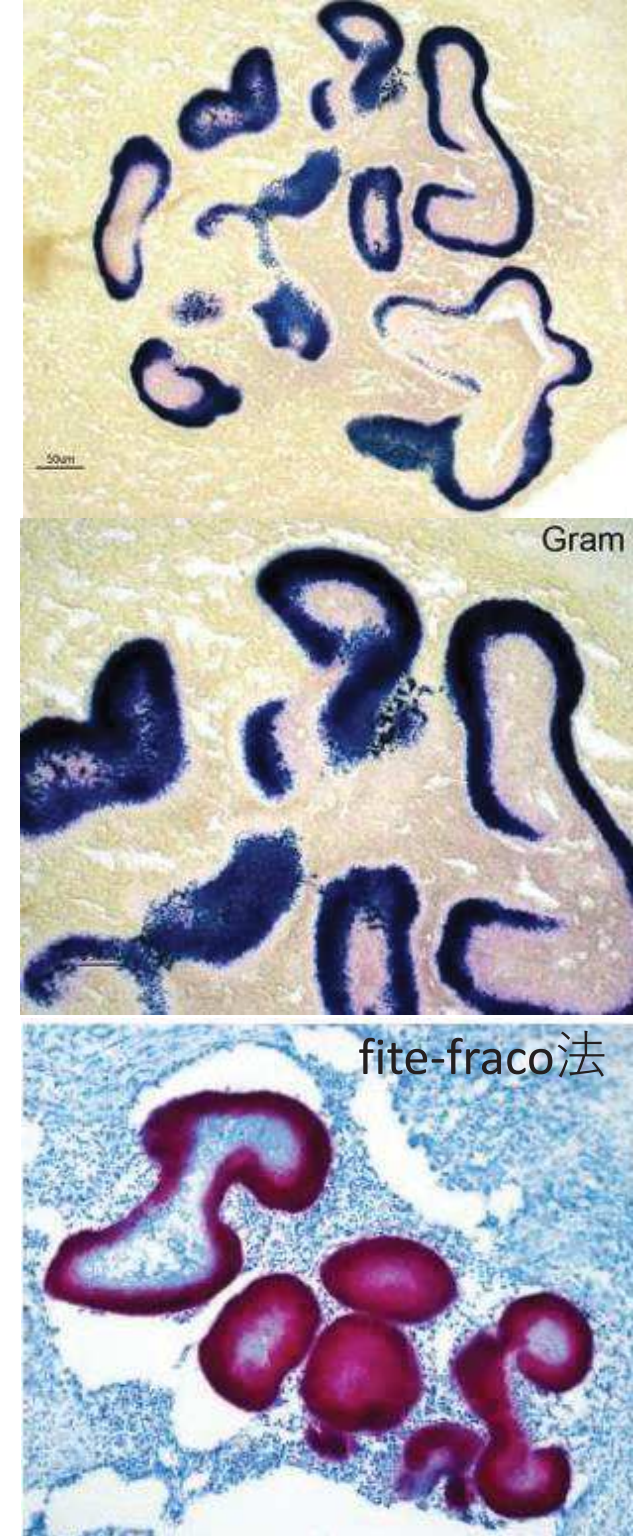
組織所見：肉芽腫性化膿性炎

染色：グラム染色：菌糸は分岐し、数珠状

**fite-fraco法**：チールネルゼン染色の変法で赤染

**抗酸菌染色陰性の場合にはアクチノマイセスと区別不可**

⇒細菌培養が類症鑑別には必要

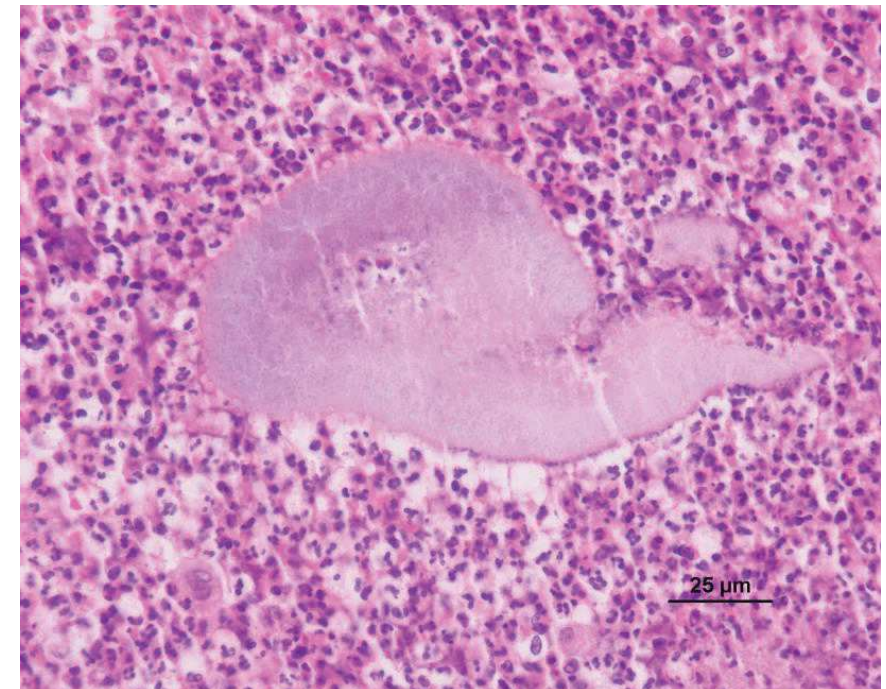
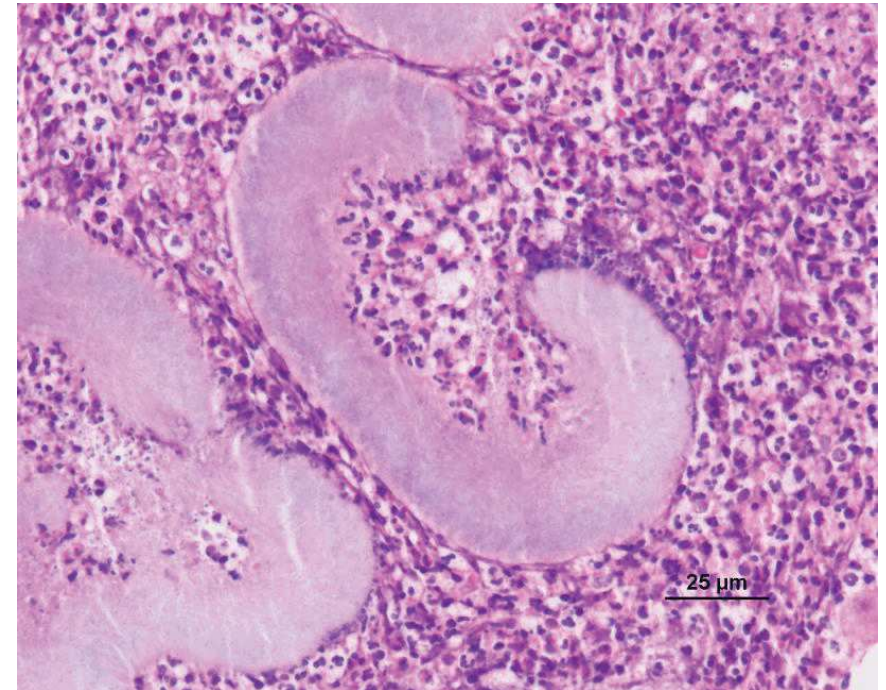




## ○ JPCのコメント

### Splendore-Hoeppli現象について

- 性状：好酸性、放射状、棍棒状で  
抗原抗体複合体、細胞残渣、  
フィブリンにより構成  
正確な性質は不明
- 真菌、寄生虫、細菌などの外来性物質  
に関連した抗原抗体複合体の沈着に対す  
る局在的な反応と考えられている
- 生体防御反応のひとつだが、  
ファゴサイトーシスや細胞内殺菌を抑制  
→ 長期の傷害・感染



# ○ JPCのコメント 反応骨形成と腫瘍性の骨疾患を識別

## 1. 「骨形成」と「骨化生」の識別

元の組織構造を捜す \* 骨ならオステオン

## 2. 「反応性骨形成」と「腫瘍性骨形成」の識別

○ 骨芽細胞の特徴、方向性

⇒ 骨芽細胞は間葉系幹細胞が完全に分化したもの、細胞集団の有糸分裂活性なし

○ 反応性の骨形成：骨芽細胞がギャップジャンクションで規則正しく配列

○ 腫瘍性の骨：間葉系の細胞が規則性なし でたために配置され骨基質が形成

